

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 (19)

県営中山間地域総合整備事業(西之表東海地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

柿之木遺跡

2007年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

序 文

種子島は、黒潮海流の中に位置し、低平な台地と数多くの小川が流れ、古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあったことから立切遺跡・横峯遺跡・奥ノ仁田遺跡・三角山遺跡・鬼ヶ野遺跡・広田遺跡などこれまで島の各所から全国的にも有名な遺跡が数多く発見されています。

今回発掘調査を行った柿之木遺跡は、中山間地域総合整備事業（西之表東海地区）に伴い、西之表市教育委員会が調査を実施したものであります。

本遺跡からは、縄文時代早期の土器や磨石・石皿などの石器類が出土しており、遺跡の所在する現和地区にも同時期の遺跡が多数発見されていることから、古くからこの地で人々が生活を営んでいたことが伺われ、本遺跡の出土遺物は種子島の縄文時代早期の様相を探るうえで貴重な資料のひとつとなりました。

本報告書が学術的文献として活用されるのはもとより、市民の文化財保護に対する意識高揚の一助となることを念じる次第であります。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、ご協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、現和地区の関係者、熊毛支庁土地改良課、ならびに発掘調査に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

西之表市教育委員会
教育長 有 島 正 之

報 告 書 抄 録

ふりがな	かきのき いせき							
書名	柿之木遺跡							
副書名	中山間地域総合整備事業(西之表東海地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	19							
編集者名	沖田純一郎							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2007年3月9日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柿之木遺跡	鹿児島県 西之表市 現和武部 柿之木	462136	100	30° 39′ 42″	131° 03′ 11″	確認調査 20040517 ～ 20040614 緊急調査 20050526 ～ 20050610	12 m ² 70 m ²	中山間地 域総合整 備事業 西之表 東海地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柿之木遺跡	散布地	縄文時代早期	集石	土器 (貝殻文系土器等) 磨石 石皿				

例 言

1. 本書は中山間地域総合整備事業（西之表東海地区）に伴う柿之木遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）の委託を受け、西之表市教育委員会が実施した。
3. 本書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 本書の遺物番号は全て通し番号で本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は沖田が行い、桑原とも子、原里菜が測量・実測の補助を行った。
6. 本書の執筆と編集は沖田が行い、遺物の洗浄・注記・拓本・実測・トレース・図面整理は沖田、内田順子、末満直美、荒井美佳子、原里菜が行った。
7. 写真図版の遺物撮影は菊池スタジオ菊池一文氏と沖田、荒井美佳子が行なった。
8. 整理作業に関して、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。
9. 出土遺物は西之表市教育委員会で保管し、展示・活用する。

目 次

序文

報告書抄録

例言

第I章 調査の経過	2	第2節 層位	13
第1節 調査に至る経緯	2	第3節 遺構	17
第2節 調査の組織	2	第4節 遺物	19
第3節 調査の経過	3	(1)土器	19
第II章 遺跡の位置と環境	5	(2)石器	24
第1節 地理的・自然的環境	5	第IV章 調査のまとめ	26
第2節 歴史的環境	8	第1節 遺構	26
第III章 調査の概要	13	第2節 遺物	26
第1節 調査の概要	13	第3節 総括	27

挿図目次

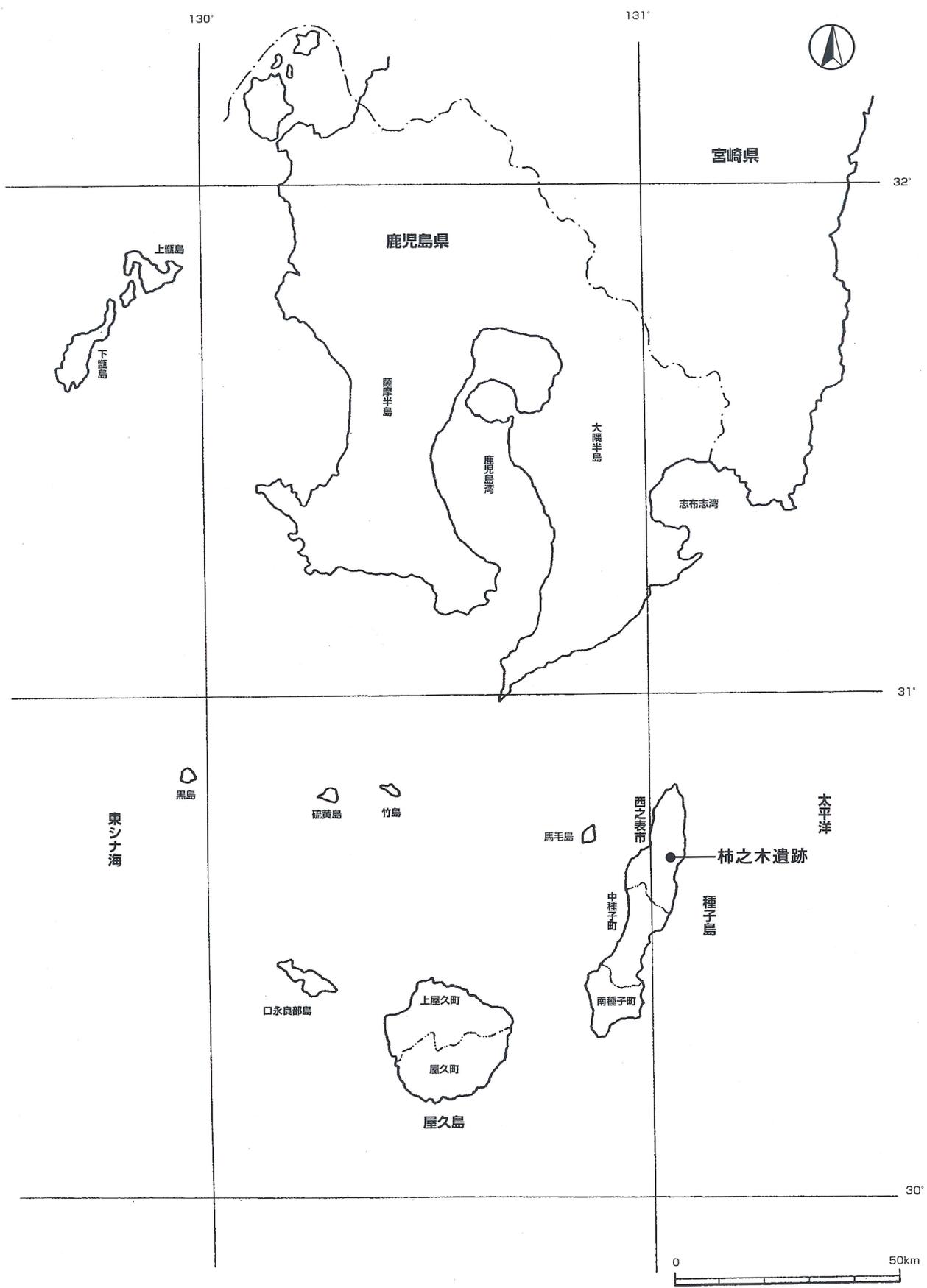
第1図 柿之木遺跡の位置	1	第8図 遺物出土状況・1号集石配置図	18
第2図 種子島の地形	7	第9図 出土遺物(1)	19
第3図 柿之木遺跡と周辺遺跡図	11	第10図 出土遺物(2)	21
第4図 発掘調査地	14	第11図 出土遺物(3)	22
第5図 北側土層断面図	15	第12図 遺物出土状況	23
第6図 南側土層断面図	16	第13図 出土遺物(4)	24
第7図 集石	17		

表目次

第1表 柿之木遺跡周辺遺跡地名表	12	第3表 土器観察表	25
第2表 1号集石検出状況	17	第4表 石器観察表	25

写真図版

図版1 調査状況(1)	29	図版4 出土遺物(1)	32
図版2 調査状況(2)	30	図版5 出土遺物(2)	33
図版3 調査状況(3)	31		



第1図 柿之木遺跡の位置

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）は、西之表市内において中山間地域総合整備事業（西之表東海地区）を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。

これを受けて、県文化財課が埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、事業区内に柿之木遺跡他、数箇所遺跡が所在することが判明した。

分布調査の結果をもとに熊毛支庁土地改良課・県文化財課・西之表市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財と開発事業の調整を図るため、埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。

柿之木遺跡の確認調査は、平成 16 年 5 月 17 日から 6 月 14 日まで、西之表市教育委員会が調査主体となり行った。確認調査の結果、工事対象地内の一部に遺物包含層が残存することが確認された。調査後、熊毛支庁土地改良課・西之表市教育委員会が再度遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、遺物包含層を現状保存することは不可能なため、工事着工前に緊急発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うこととなった。

柿之木遺跡の緊急発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成 17 年 5 月 26 日から 6 月 10 日まで行った。緊急発掘調査の調査面積は 70㎡である。

第 2 節 調査の組織

（緊急発掘調査）

発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教育長 有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会 社会教育課 課長 河野 博康
	〃 〃 課長補佐 奥村 学
発掘調査庶務担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主査 浜渡 友子
発掘調査担当	西之表市教育委員会 社会教育課 主事 沖田純一郎
事業主体者	鹿児島県農政部 熊毛支庁土地改良課
調査協力者	現和地区 武部自治公民館長 西川 金徳
発掘調査作業員	西川宗直 本炭 敏 本炭 ミチ 木原エイ子 西川淳子 原 里菜 桑原とも子 中村 桂子

(整理・報告書作成)

作成主体者 西之表市教育委員会
作成責任者 西之表市教育委員会 教育長 有島 正之
作成企画担当 西之表市教育委員会 社会教育課 課長 河野 博康
〃 〃 課長補佐 奥村 学
〃 〃 主査 柳田さゆり

作成庶務担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主査 浜渡 友子

作成担当者 西之表市教育委員会 社会教育課 主査 沖田純一郎

事業主体者 鹿児島県農政部 熊毛支庁土地改良課

整理作業員 内田順子 末満直美 荒井美佳子 原 里菜

第3節 調査の経過

確認調査の結果をもとに、工事対象地内において遺物包含層残存部分範囲のみ緊急発掘調査を行った。アカホヤ火山灰層下位より遺物が出土することが確認調査で判明していたが、調査対象地内において、このアカホヤ火山灰層は一部削平されている箇所もあったため、コンクリート、砂利を重機で除去後、人力により慎重に土層を観察しながら掘り下げを進めていった。調査地周辺が人家及び作物を植えている畑地であったため、排土置場のスペースが十分に確保できず、排土処理に時間を費やす結果となった。以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

5月26日	木	重機により表土剥ぎ。水道管移設作業。
27日	金	重機による表土剥ぎ。南側壁面清掃。 奥村社会教育課長補佐・柏崎社会教育指導員来跡。
30日	月	発掘調査作業員、作業内容説明。調査区東西箇所人力により掘り下げ。 アカホヤ層下位より土器片・焼礫等出土。 河野社会教育課長・奥村社会教育課長補佐来跡。
31日	火	東西箇所掘り下げ。土器片・礫等出土。平板・レベル、遺物取上げ。 北側・南側、土層断面清掃、精査。熊毛支庁土地改良課職員5名来跡。
6月1日	水	集石検出作業。写真撮影。実測作業。
2日	木	雨天のため作業中止。
3日	金	集石平面・断面実測作業。北側壁面掘り下げ、黒茶褐色土まで。西側掘り下げ、 黄褐色ローム層まで。排土除去作業。
6月6日	月	南側掘り下げ、黄褐色ローム土まで。平板・レベル、遺物取上げ。 南側壁面清掃、床面清掃。熊毛支庁土地改良課職員2名来跡。

7日	火	掘り下げ。北側・南側壁面清掃，土層分層作業。 北側土層断面実測作業。調査地内床面清掃，遺構検出作業。
8日	水	掘り下げ。北側・南側土層断面実測作業。排土処理作業。 現和中学校教諭2名来跡。
9日	木	北側土層断面実測作業。調査地内床面清掃。 現和小学校5・6年生，26名・教諭2名来跡。
10日	金	南側土層断面実測作業。調査地内測量作業。発掘調査道具水洗い，後片付け。 発掘調査道具搬出作業。調査終了。調査地内重機により埋め戻し開始。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・自然的環境

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、南島約40kmの海上に位置し、南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた島であり、面積は約447km²である。最高標高は石之峰口の282.3mであり、西方に約20km離れた九州最高峰の標高1935mの宮之浦岳を有する屋久島とは地形的に対照的な低平な細長い島である。鹿児島県の離島では甌島と並び鹿児島県本土に最も近い島で、現在では飛行機で約35分、高速船では約90分で鹿児島本土に渡ることが可能である。

種子島はその近海を流れる黒潮によってもたらされた中国や琉球などの南方の国々の文化と、京都や奈良などの日本の中央文化との交流によって、固有の文化が営まれてきたと言われている。本土に一番近い島というその位置から太古から遣唐使船・遣隋使船等の海上のルートとして貴重な島であり、それ以降も海上の中継基地として重要な位置を占めていた。黒潮によって回遊してくる魚や温暖な気候、また黒潮を伝わっての人やモノの交流など遺跡から出土する遺物を見ても古より種子島の人々に黒潮は様々な恩恵を与えてくれたと思われる。西之表市の東海岸部安城小学校では毎年「瓶流し」を行っており全校児童が作文・おり鶴などを瓶に入れて流している。これまでに北海道、硫黄島（東京都小笠原村）、長崎県五島列島、沖縄、奄美大島や台湾、アメリカオレゴン州・ワシントン州・サンフランシスコ、ハワイカウアイ島・ミッドウェー島、アラスカ、フィリピンなど海外からも漂着した報告が確認されている。

船舶の難破、漂着も多数あり、それによって文化の交流が行われてきた。有名なのは1543年南種子町の前ノ浜にポルトガル人を乗せた船が漂着しそれによって日本に初めて鉄砲が伝わり、戦国の合戦の形態に大きな影響をもたらしたが、ハサミや馬、食文化、生活様式など鉄砲以外にも数多くの文化の交流が行われることとなった。他にも南種子町に漂着したドラメルタン号、西之表市に漂着したカシミア号など海外の船舶の漂着も記録に残っているだけでも多数ある。また、気候、地勢などが農業に適し、人口の割りに土地が広く生活しやすいといわれる島であったため、明治の初めから大正時代までに島外の移住者を数多く受け入れている。甌島、桜島、奄美大島・与論島・沖永良部島・徳之島などの奄美群島、鹿児島本土からは山川・坊ノ津、また香川県や静岡県からも移住が行われている。

最近では種子島の波がサーフィンに適しており、波の立つ良好なポイントが島内至るところにあるため、関東・関西などを中心に全国から波を求めサーファーが島に移住し、その数は数百名に及んでおり、今後新たな文化をもたらしていくことになるのかもしれない。

種子島は今から約5,000万年前のころ現在の九州南部とともに深い海の底にあり、僅かずつ運ばれた砂や泥が次第に厚く堆積していったものが現在の種子島の基盤をなす熊毛層群と呼ばれるものである。古第三紀始新生に属するものである。その後今から3,000万年前の古第三紀漸新生の終わりの地殻変動の海底隆起によって種子島が海上に姿をあらわしたと考えられている。陸化すると同時に風雨による侵食がはじまり、谷や山が形成され一方では侵食によって削られた土砂が川に流れ堆積していった。この堆積物が莖永層群と呼ばれるものである。やがて約1,000万年前、島の南東部から海進がはじまり、一旦陸化した種子島は再び海底に姿を消すこととなった。その後、約500万年前の新第三紀鮮新生のころ再び地殻変動により種子島は海上に姿を現す。海底の熊毛層群や莖永層群は侵食を受け、その侵食された土砂が堆積したもの

が上中層群である。島の南部と北部にある不規則な海岸線は種子島が海底に沈んだり陸化したりの繰り返しによって形成されたものといわれている。

種子島は時代とともに熊毛層群、荃永層群、上中層群と大きく三つの層群から成り立ち、その上に火山灰起源のローム層が数枚にわたり堆積していると考えられ、海底に沈んだり、陸化を繰り返しながら現在の姿になったのは、約 10,000 年前位だと推定されている。

種子島の地形は二つの断層線によって、地形上、北部・中部・南部と三つに分けることができる。

北部は西海岸、上西の大広野と東海岸、現和の田之脇を結ぶ西南向きの断層ラインから北のことであり、解析台地や海岸段丘が不規則に絡み合っている地である。なお、この北部には、種子島で 2 番目に高い標高 237.9 m の天女神楽が風雨の浸食で解析され台地状となり信仰の対象となっている。

中部は西海岸、納官の竹之川と東海岸、野間の中山を結ぶ断層ラインと北部の断層ラインに挟まれた地であり、種子島で最も幅の広い所である。ここには本島最高標高の石之峰口があり、海岸段丘に不規則の解析台地が交錯し複雑さを見せている。東海岸は沈降によるリアス式状の海岸を呈しており、犬城海岸には、馬立の岩屋と呼ばれる海食洞がある。

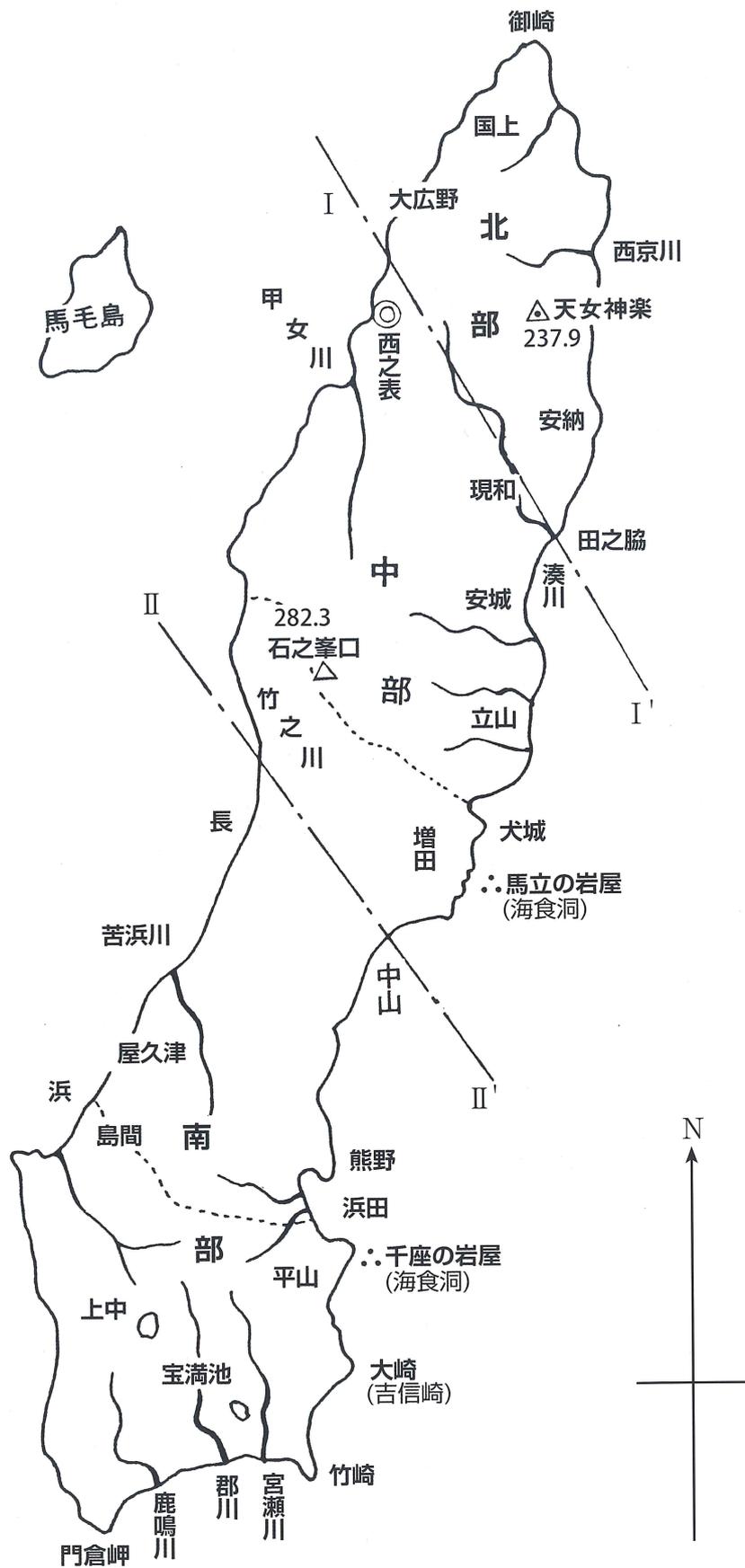
南部は納官の竹之川と東海岸、野間の中山を結ぶ断層ラインより南側の地で、西海岸は隆起のため単調で屈曲が少なく、砂丘がつづく。東海岸は犬城海岸から続くリアス式の海岸で起伏に富み、浜田の海岸には千座の岩屋と呼ばれる巨大な海食洞がある。この地域の中央部は起伏の少ない中種子中央台地であるが、これに続く南種子町中央台地は、比較的解析が進み、地形が複雑さを呈し、その西海岸部では海岸段丘が急傾斜し平地が少なくなっている。東海岸部では鹿鳴川、郡川、宮瀬川で沖積平野が形成され種子島で最も広い水田地帯となっている。

種子島の岩石について述べてみる。種子島の岩石は大部分が砂岩、泥岩、頁岩、などの堆積岩であり、これら堆積岩には化石が産出される事もある。砂岩のうちいくらかは熱変成を受けホルンフェルス化したものも見受けられる。また火成岩も一部に分布し、ランプロファイア（カンプトナイト・俗称種子御影）、枕状玄武岩（枕状熔岩）、セキエイハン岩や他に珊瑚の菊目石などがある。

ランプロファイア（カンプトナイト・俗称種子御影）は火成岩の粗粒粗面玄武岩のことで、青御影またはゴマ石とも呼ばれ、墓石に利用されていた。その分布は種子島北西部に見られ、北北東から南南西に約 20km ほどにわたって砂岩、頁岩の互層の中に貫入し 30 箇所露頭があると記録がある。この玄武岩は中新世中後期に形成されたものと考えられている。

枕状玄武岩（枕状熔岩）は南種子町の立石海岸にみられ、南種子町の文化財に指定されている。枕状になったのは、溶岩が海底で噴出したとき水圧で大きく広がらず急冷されたためだと考えられており、50～80cm の枕状になっている。この立石海岸の真向かいの位置にある屋久島の田代川河口の海岸（屋久町）には俵状熔岩と呼ばれる大規模な枕状玄武岩があり興味深いところである。

菊目石は腔腸動物の石珊瑚の一種で、これがついたあとは、菊の花が集まったようになるのでこの名が付いたといわれている。熱帯に限らず静岡県駿河湾付近の浅海まで住んでいるといわれている。種子島ではこの石を古くから防風、防潮のためとして住居、道路の石垣に使用していたが戦後ほとんど利用されなくなった。



「種子島の自然～地質ガイド～」
 西之表市教育委員会 種子島地学同好会 1993年より

第2図 種子島の地形

柿之木遺跡が所在する西之表市現和地区は西之表市の東海岸に立地し、海岸線に沿って幾重にも台地が延び、その間には狭い小谷が形成されている。現和は記録によるともともと現和ではなく見和と呼ばれており、見和氏が支配していたとされている。その後大隅の杵寝氏の所領となるが、種子島氏が全島を支配することになり、それを不満とする杵寝氏が足利幕府に送った訴状の回答に、見和を現和と書き誤って通知してきたため、これを境に見和村は現和村と呼ばれるようになったという説もある。またこの遺跡は現和の武部集落に立地しているが武部という地名は本来建部であったといわれ、先述した杵寝氏の姓は本来建部氏であり、代官を配していた地が武部集落であるので、建部が武部となり年月を重ねるうちに武部（ぶぶ）と称するようになったとの説もある。種子島氏と戦渦を交えた杵寝氏との関係を探る上からも興味深い地域である。

第2節 歴史的環境

種子島では旧石器時代から歴史時代に至るまで数多くの遺跡が発見され、これまで公共工事に伴う発掘調査、大学或いは研究機関による学術発掘調査が行われている。

種子島の旧石器・縄文・弥生・古墳時代の遺跡について大まかに述べると、約3万年前の旧石器時代の遺跡である横峯遺跡（南種子町）・立切遺跡（中種子町）などがあり、また平成18年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を行った大津保畑遺跡（中種子町）では約3万年前の堆積物である種Ⅳ火山灰層の下から落とし穴が12基検出され、現時点では日本最古となる可能性が高く、落とし穴の出自を考える上で貴重な資料となった。またA T火山灰下層より礫群が4基検出されており、今後も種子島がA T火山灰堆積以前の旧石器研究の重要なフィールドであることを再認識することとなった。種子島はA T火山灰以下に種Ⅳ・種Ⅲ・種Ⅱ・種Ⅰと複数の火山灰層が存在し、場所によってはその堆積は極めて良好であり、時代の判定もこの火山灰により明確に行うことができるため、今後も種子島の旧石器時代の遺跡は増加していくことが充分考えられる。旧石器時代末期の遺跡は細石核・細石刃が採集された湊遺跡・大中峯遺跡（西之表市）や細石核、細石刃が出土した立切遺跡・三角山遺跡（中種子町）、銭亀遺跡（南種子町）などが挙げられる。

縄文時代では奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査によって鹿児島本土以南で縄文時代草創期の遺跡が初めて確認され、南九州圏の縄文文化の先進性を示すこととなり、出土品の一部は平成11年に鹿児島県の文化財に指定された。鬼ヶ野遺跡（西之表市）では縄文時代草創期の多数の遺構、遺物が発見されており、特に縄文時代草創期では県内でも発見例が少ない竪穴状遺構や400点を超える多量の石鏃や数多くの丸ノミ形石斧が出土したことが注目されている。三角山遺跡（中種子町）でも同時期の竪穴住居状遺構や多くの隆帯文土器が出土している。いずれの遺跡も遺物の出土量が膨大な点が特筆される。これらの遺跡の調査によって種子島の縄文時代草創期の遺跡が注目を浴びることとなり、今後も草創期の遺跡の調査は増加していくと思われる。その後の縄文時代早期・前期の遺跡も島内各地で数多く確認されており、近年は西之表市東海岸部の安城・立山地区の発掘調査で縄文時代早期前葉から終末期の遺跡の調査（牧野遺跡・二俣野遺跡・三本松遺跡・日守遺跡・東前平遺跡・楯ノ刃遺跡・芦野遺跡）が行われ、特に早期前葉の吉田式土器の出土が数多く確認されている。前期では轟式土器や曾畑式土器が出土し

た遺跡があり、下剥峯遺跡・本城遺跡（西之表市）大園遺跡・千草原遺跡（中種子町）、赤石牟田遺跡・上平遺跡（南種子町）などがある。中期では春日式土器出土の宮田遺跡（中種子町）があるが、この時期の遺跡数、遺物の報告例が他の時期と比べると極端に少ないため、現段階では種子島の縄文時代中期の様相は不明であると言わざるをえないであろう。後期の遺跡は指宿式・市来式・丸尾式・一湊式などが出土する遺跡が島内各地で確認されており、膨大な石皿などの石器類や竪穴状遺構が検出された浅川牧遺跡（西之表市）多数の遺物が出土した寺之門遺跡（西之表市）や納曾式土器の標識遺跡である納曾遺跡（西之表市）、特異な配石遺構が多数検出された藤平小田遺跡（南種子町）などがある。

晩期の遺跡では黒川式土器や人骨・貝製品が出土した一陣長崎鼻貝塚（南種子町）や黒川式土器が出土し晩期から弥生時代にかけての生活跡とされている阿嶽洞穴（中種子町）などがある。

弥生時代から古墳時代にかけては下剥峯遺跡・田ノ脇遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡・泉原遺跡（西之表市）、古墳時代後期の上能野式土器の標識遺跡で鉄製の釣針が出土している上能野貝塚（西之表市）や上能野式土器の単純遺跡である嶽ノ中野A・B遺跡（西之表市）、多数の人骨と貝製品が出土した広田遺跡（南種子町）、覆石墓・人骨が出土した鳥ノ峯遺跡（中種子町）などがある。特に広田遺跡は100体以上の人骨が異なった習俗で埋葬され、副葬品に南海産の貝を利用した貝符などの貝製品が多数出土した国内でも有名な埋葬遺跡であり、出土品の一部は平成18年に国の重要文化財に指定された。貝符に施された文様から古代中国文化との関係が伺われるものである。近年南種子町教育委員会によって再び調査が行われ、墓域の広がりや埋葬遺物、埋葬時期など新たな発見があり、今後の報告に期待するところである。

種子島において、弥生・古墳時代の遺跡は縄文時代に比べると数は少なく、またこの時期の集落址等は島内でいまだ発見されていないため、未解明な点が多いのが現状である。

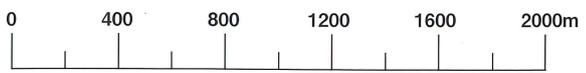
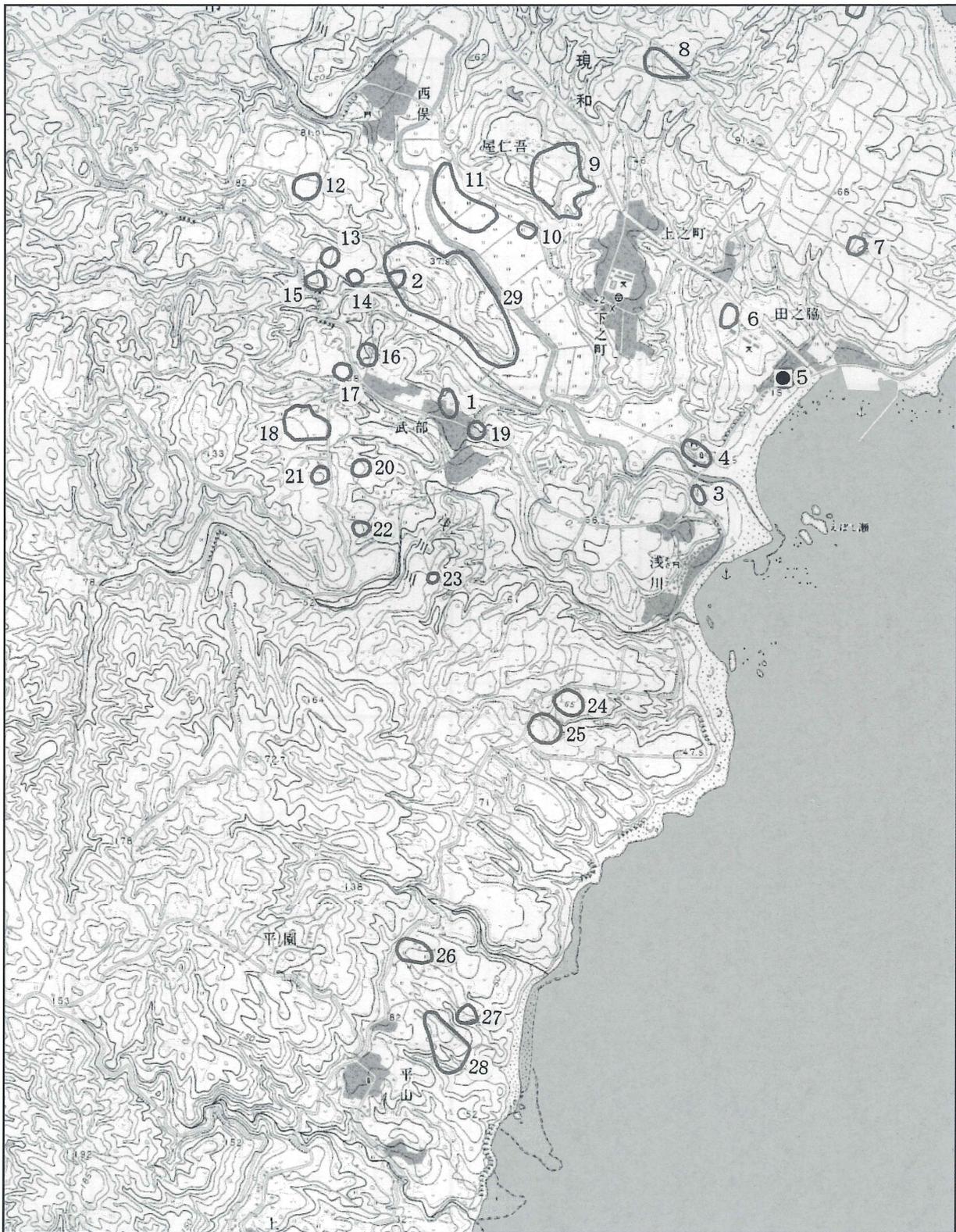
柿の木遺跡が所在する西之表市の現和地区でも良好な遺跡が発見され調査が行われている。特に昭和52年に鹿児島県教育委員会によって調査が行われた、下剥峯式土器の標識遺跡である下剥峯遺跡は、アカホヤ火山灰と出土土器の関係が種子島で明確に把握された遺跡である。また沖縄との交流が考えられる室川下層式土器も出土している。昭和54年に鹿児島県教育委員会によって調査が行われた浅川牧遺跡では縄文時代後期の一湊式土器が多数出土し、この土器に伴う竪穴状住居址が検出され、県内では最初の発見となった。また土坑も66基検出されている。この遺跡は縄文時代後期中葉の市来式土器を主体とする土器や大量の磨石、石皿類が出土したことや、壺形土器の発見などとともに、先述した住居址、土坑の存在など種子島の縄文時代後期の様相を考える上で貴重な遺跡となった。種子島の遺跡では数少ない古代の遺跡として西俣遺跡も現和地区に所在する。灰釉陶器を用いた蔵骨器と越州青磁窯青磁・長沙窯青磁が出土している。天長7年（824年）までは多嶽国が置かれており、国府や国分寺（嶋分寺）が存在していたことが考えられ、その所在地や中央との交流などを考える上で貴重な出土遺物である。しかしながら、現在まで国府や国分寺（嶋分寺）の所在地については島間説、莖永説、西之表説、現和説、国上説、移動説など諸説があるが、現段階では未解明である。

武部には1713年（正徳3年）に琉球から技師を招き製鉄を行ったとの記録があり、製鉄所跡といわれている箇所は昭和50年に西之表市の文化財に指定されている。製鉄所跡は湊川・浅川に挟まれた低地部分に位置し、この製鉄所跡を取り囲むように小川が流れ、水流を使っ

て水車による製鉄を行っていたとも言われている。正徳年間以前にも製鉄が行われていたと考えられ、製鉄の開始された時期、規模などを確認するため平成13年詳細分布調査が西之表市教育委員会によって行われている。調査の結果8基の製鉄関連遺構が検出されている。うち3基が製鉄炉の可能性が強い。また椀形滓が検出された遺構が1基あり、形態から製錬炉であると判断され、製鉄・製錬を当地で行っていたことが明らかとなった。遺構内からは時期を判断できる遺物が検出されなかったため操業開始時期等を把握することはできなかったが、種子島の製鉄史を解明していくための重要な場所のひとつである。

参考文献

- 西之表市教育委員会 種子島地学同好会 「種子島の自然」 1993年
- 西之表市教育委員会 西之表市文化財保護審議会 「わたしたちの種子島 自然編」 1993年
- 西之表市教育委員会 西之表市文化財保護審議会 「わたしたちの種子島 歴史編」 2002年
- 西之表市教育委員会 「ふるさと歴史散歩 第2集」 2000年
- 現和地域武部高齢者クラブ 西之表市農業改良普及所
「よらいきやりもうそう 武部郷土のあゆみ」 1983年
- 鹿児島県教育委員会 「先史古代の鹿児島 資料編」 2005年
- 西之表市教育委員会 「嶽ノ中野B遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 1995年
- 西之表市教育委員会 「武部製鉄所跡 奥ノ仁田遺跡 赤尾木城址 太田遺跡」
西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 2004年
- 西之表市教育委員会 「鬼ヶ野遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 2004年
- 中種子町教育委員会 「立切遺跡」 中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 2002年
- 南種子町教育委員会 「横峯遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1993年
- 南種子町教育委員会 「横峯C遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 2000年
- 南種子町教育委員会 「藤平小田遺跡 第1分冊」
南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 2002年
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 「三角山遺跡群(3) 第1分冊」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96) 2006年
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 「大津保畑遺跡現地説明会資料」 2007年



第3図 柿之木遺跡と周辺遺跡図

第1表 柿之木遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	柿之木	西之表市現和武部	縄文時代早期	平成16年確認調査 平成17年発掘調査
2	直助峯	西之表市現和下之町		昭和63年確認調査
3	上浅川	西之表市現和浅川	古墳	平成9年発掘調査
4	内野堂	西之表市現和下之町	古墳	平成10年農政分布調査
5	田之脇	西之表市現和田之脇	弥生時代後期	昭和41年発掘調査
6	泉原	西之表市現和下之町	弥生・古墳	
7	東方ノ平	西之表市現和上之町	弥生	
8	中之峯	西之表市現和上之町	縄文	昭和51・59年確認調査
9	屋仁吾	西之表市現和西俣	縄文時代後期	平成16年確認調査
10	西俣	西之表市現和西俣	縄文時代草創期・ 早期, 弥生時代・ 古代	昭和54年発掘調査
11	森田	西之表市現和上之町	縄文・古代	平成10年農政分布調査
12	院房	西之表市現和武部	中世	
13	下佐野和	西之表市現和武部	縄文	昭和63年確認調査
14	提	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
15	南佐野和	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
16	武部	西之表市現和武部	縄文時代後期	
17	横野平	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
18	武部製鉄所跡	西之表市現和武部	近世・近代	平成13年詳細分布調査
19	石原平	西之表市現和武部	縄文	平成10年農政分布調査
20	山道之平	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
21	池之迫	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
22	下池之迫	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
23	二俣野	西之表市現和武部		昭和63年確認調査
24	浅川牧Ⅰ	西之表市現和浅川	縄文時代早期・ 後期・晩期	昭和54年発掘調査
25	浅川牧Ⅱ	西之表市現和浅川	縄文時代早期・ 前期・晩期	昭和54年発掘調査
26	牧野B	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
27	牧野	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成16年発掘調査
28	二俣野	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成15年発掘調査
29	道月ノ峯	西之表市現和武部	中世	

第三章 調査の概要

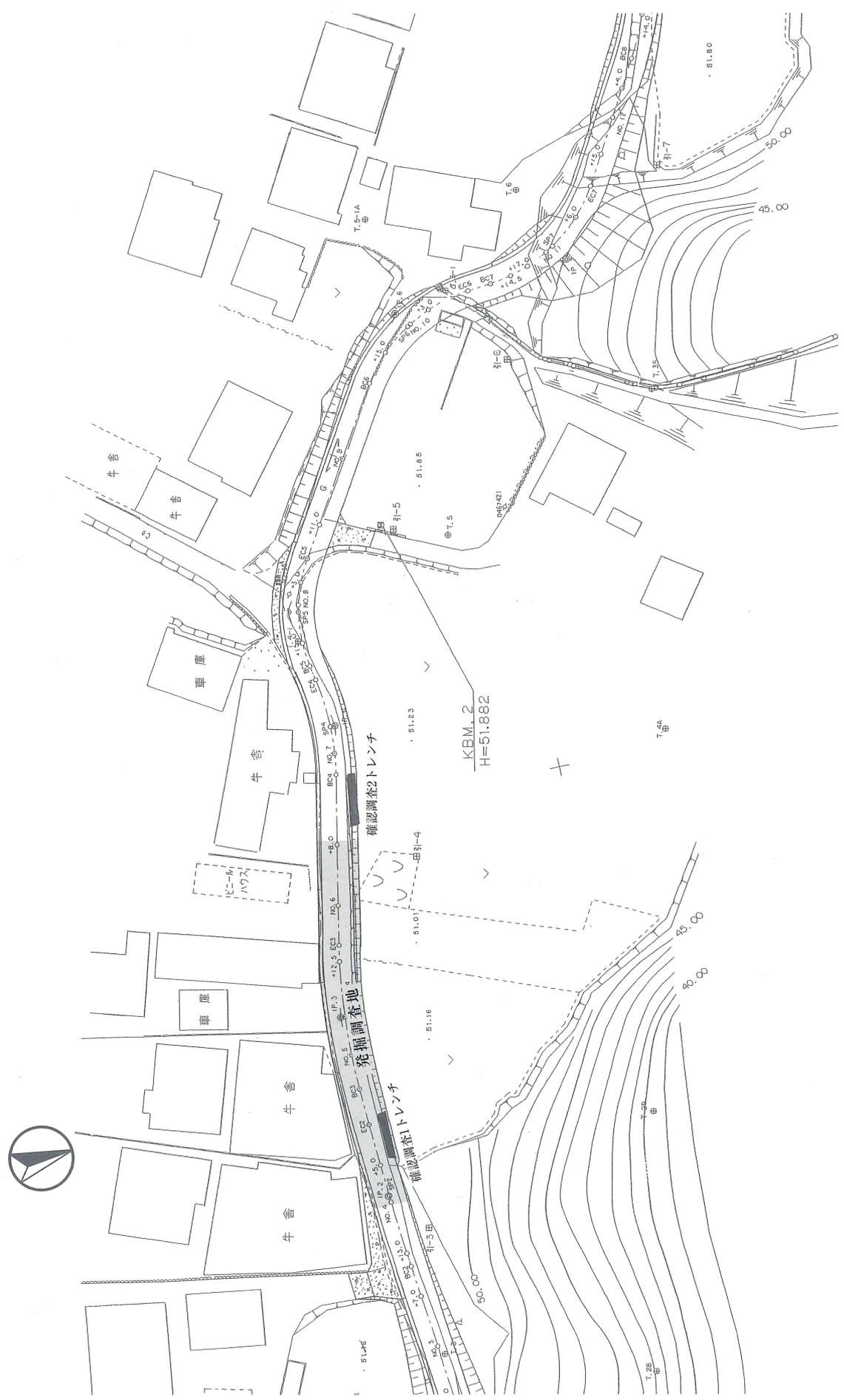
第1節 調査の概要

緊急発掘調査は確認調査の1トレンチ周辺の工事対象地内において、遺物包含層が残存すると判断した部分のみを実施した。発掘調査対象地が生活道路として使用されているため、周辺の住民・熊毛支庁土地改良課と協議した結果、調査対象地を半分に分け、始めに畑地側の道路部分から調査を開始し、残りの人家側よりの道路については工事着工前に実施することとなった。調査を進めていくにつれ、人家側の道路部分には遺物包含層は確認されず、すでに一部滅失していることが判明したため、人家側よりの道路部分の発掘調査は行わなかった。よって調査面積は70㎡となった。

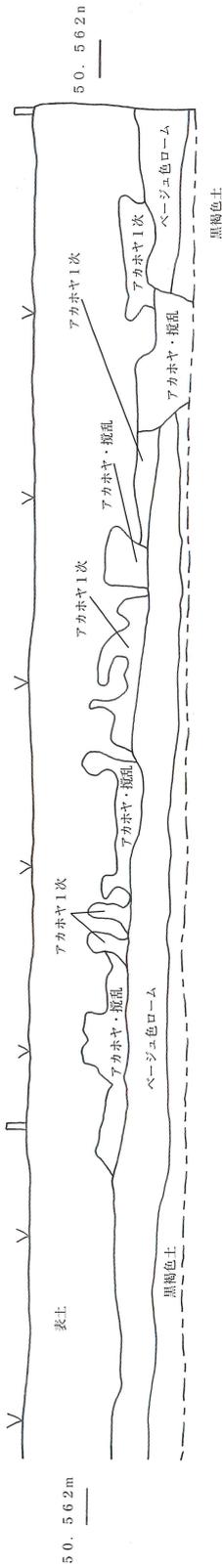
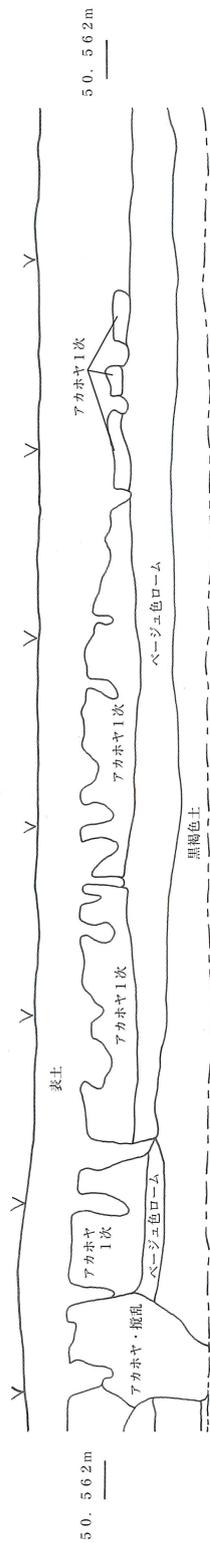
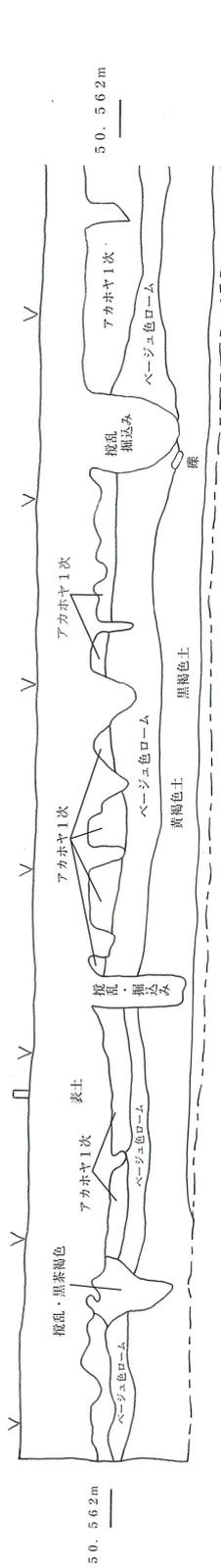
第2節 層位

土層は場所によって、著しい攪乱を受けている箇所や、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。確認調査の結果より第IV層以下は無遺物層であるため、今回の調査の最下層をIV・V層とした。なお、I層表土の上には、場所によってコンクリートを敷き、その下位に砂利が見られる箇所もあった。

I 層 表土	黒茶褐色土
II 層 黄橙色火山灰層	アカホヤ火山灰層 (約 6,400 年前の鬼界カルデラ噴出物)
III 層 ベージュ色ローム土	遺物包含層 (縄文時代早期)
IV 層 黒褐色土	粘質がある。一部黒茶褐色に見られる場所もある。
V 層 黄褐色土	非常に粘質がある



第4図 発掘調査地



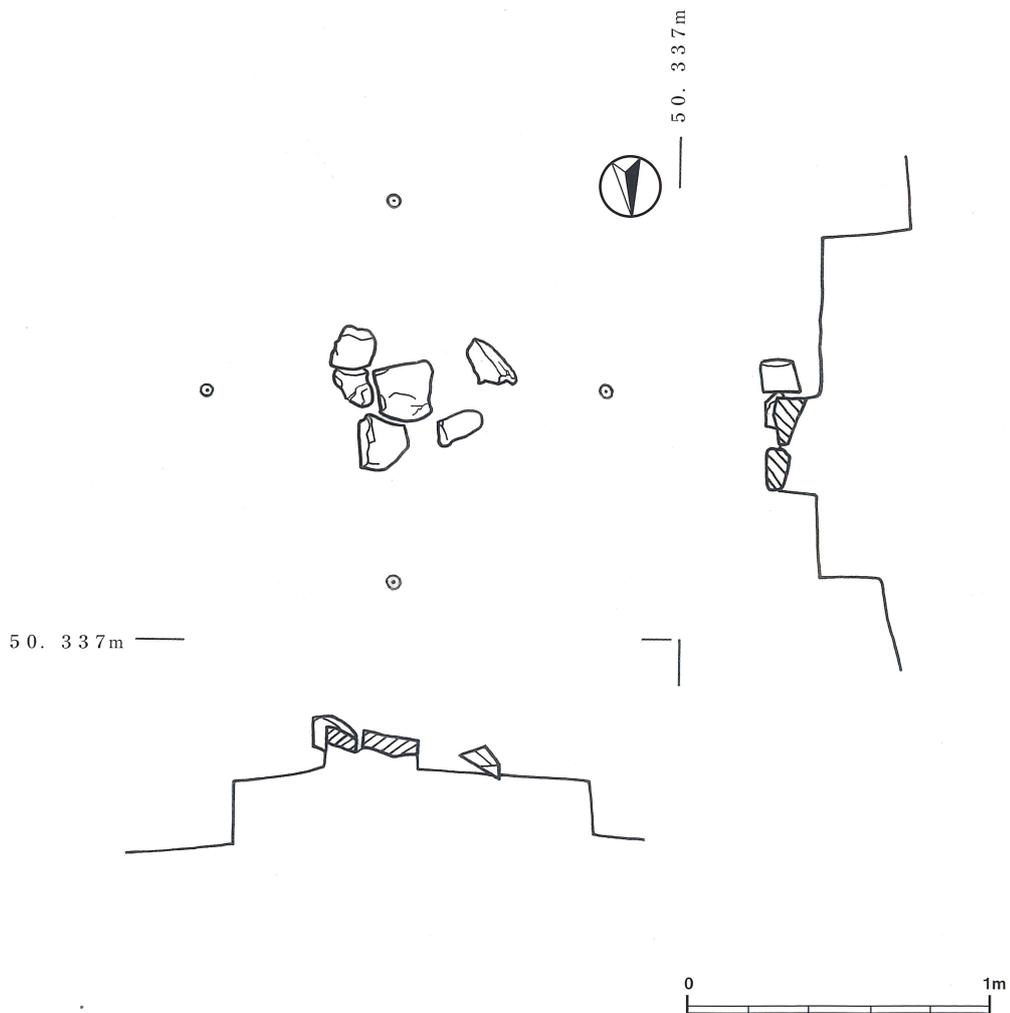
第5図 北側土層断面図

第3節 遺構

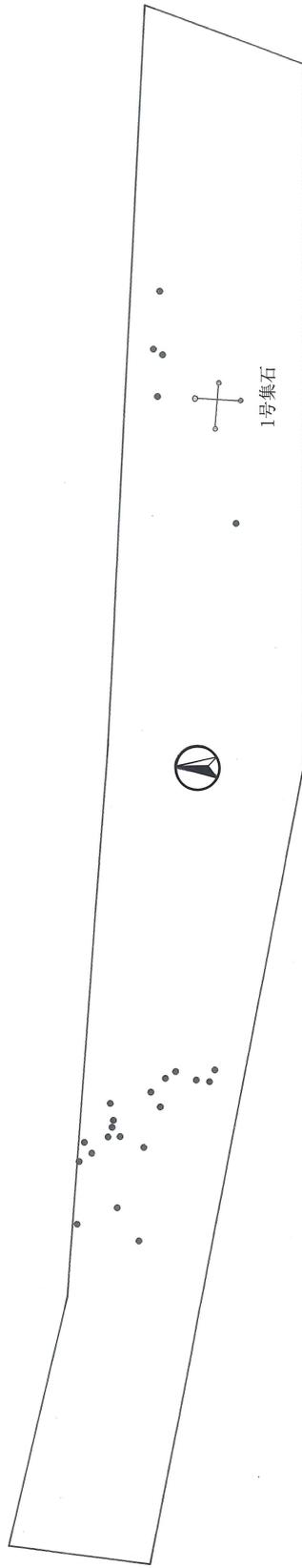
調査地東よりで、拳大の礫が6点まとまって検出された。検出した層は第Ⅲ層のベージュ色ローム層である。礫が集中している範囲は約2m×2mである。礫は炎熱を受け、赤化し熱破砕が見られるものもある。構成される礫は全て砂岩である。礫には敲打痕や擦痕、剥離などの調整痕などがみられるものはなかった。検出状況から集石（調理場の跡）と思われ、1号集石とした。今回検出されたものは集石が崩壊し、中心部のごく一部が残ったものであると思われる。集石の内部、周辺からは炭化物等は検出されなかった。また下位には掘り込みは確認されなかった。調査地全体を第Ⅲ層面及びⅣ層上位面で精査を行い、遺構の有無を調査したが集石以外の遺構は検出されなかった。調査範囲が狭小であったことも遺構が検出されなかった要因の一つであると思われる。

第2表 1号集石検出状況

遺構名	検出層	大きさ	構成される礫
1号集石	第Ⅲ層 ベージュ色ローム土	200cm×200cm	6点



第7図 集石



第8図 遺物出土状況・1号集石配置図

第4節 遺物

遺物は土器片が一括取り上げ品もふくめ41点出土したが、整理作業後の接合により最終的な点数は35点であった。石器類は3点の出土であった。4点の土器片が攪乱層からの出土で、他は第Ⅲ層の遺物包含層から出土したものである。時期区分では縄文時代早期に位置づけられるものである。

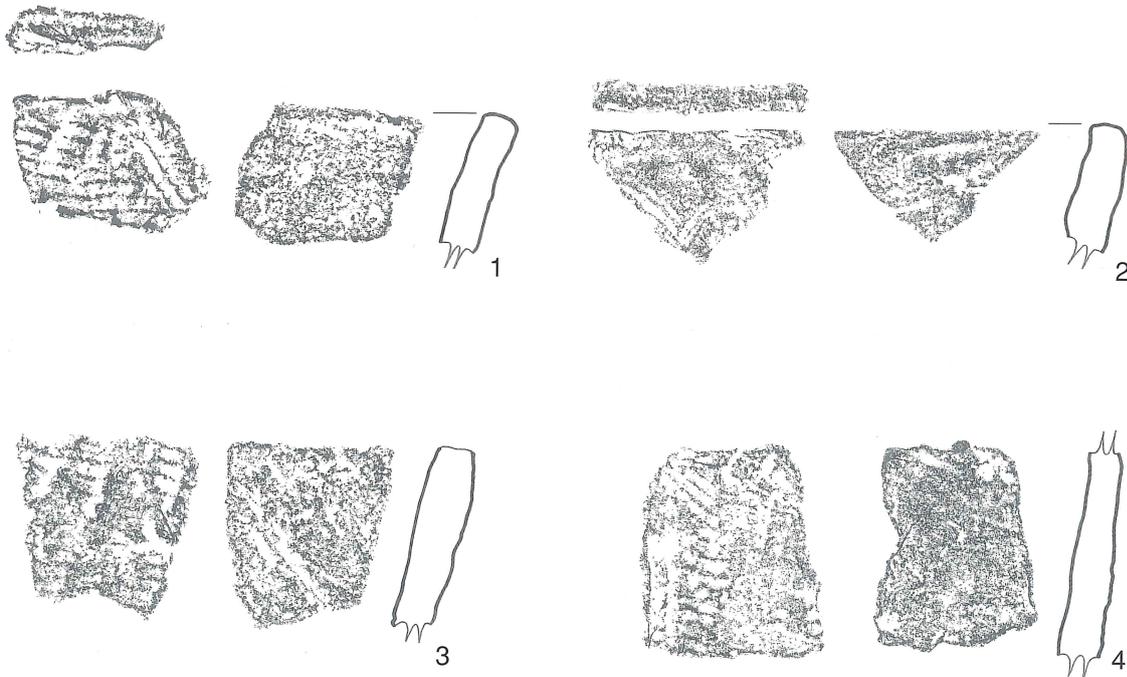
(1) 土器

出土した土器は口縁部2点、底部3点他は胴部である。土器片は小片や風化したものが半数以上を占めたため、出土した土器片の全てを図化することは出来ず、図化したものは12点に留まった。土器は外面の施文等から、3類に分類した。

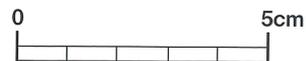
I類土器(第9図1~4, 第10図5~7)

出土した土器の主体を占めるものである。外面に貝殻条痕を施しているものである。中にはこの貝殻条痕が条線状に施されているものも見られる。貝殻条痕を条線上に施している土器片の器形は縄文時代早期前葉に多く見られる円筒形土器とはやや異なり口縁部が若干外反し、胴部は丸みをもつ、底部から胴部、口縁部にかけてゆるやかに開いていくものと思われる。

1・2は口縁部である。1は口縁部上位に1条の浅い貝殻押引文を施し、横位、斜位に貝殻条痕文を施しているものである。貝殻押引文は途中で終わっており、全周に施しているのかは不明である。内面は丁寧なナデ調整が行われているが、口唇部は粗く仕上がっている感がある。器形はわずかに口縁部が外反するものと思われる。外面には地文調整は行われていない。2は外面に貝殻条痕文が斜方向に施されている。口唇部は平坦に調整され口唇部外面側縁部に沿って浅い細かい刻み目が横位に5箇所施されている。内面はナデ調整であるが、非常に粗く調整が行われている。器形は口縁部がわずかに外反するものと思われる。1と同様外面に地文調整は行われていない。



第9図 出土遺物(1)



3から7は胴部片である。3は1と同様浅い貝殻押引文がみられる。下位に1条の浅い貝殻押引文が横位に施され、上位にはわずかながら横位の貝殻条痕文が見られるが、途中でナデ消されているようにも見える。内面はケズリ調整が施されている。4は上位・中位に貝殻押引風の貝殻腹縁文を横位に施しその上に縦位、斜位の貝殻上痕文を施しているが、左半分はナデ消しによって、条痕文は消滅している。内面はナデ調整が行われている。1・3～4は施文方法、胎土、焼成感が非常に似通っており、同一個体の可能性が極めて強い。5から7は貝殻条痕文が条線状に施され、斜方向にクロスさせているものであり、厚手の土器である。胎土、焼成、施文などにより同一個体と思われる。

5は貝殻条痕文が上位から下位にかけて右下がり、左下がり、斜位に交互に施文され、X状を呈している。胎土に小礫が含まれるのが特徴的で内面は工具によるナデ調整であるが、粗く仕上がっている。器形はわずかに丸みをもつものであると思われる。6は8条の条痕文が斜方向に交差するように施文が施されているが、表面中央部の施文は浅く、はっきり確認することは困難である。内面はナデ調整である。7も数条の条痕文が交差するように施されているが、特に中心部にかけて、文様は消えかかっておりはっきりしない。内面はナデ調整である。5～7の土器片は地文調整が行われておらず、器形は胴部から口縁部にかけて若干開いていくと思われる。縄文時代早期後半の範疇に入るものと思われる。

Ⅱ類土器（第11図8）

Ⅱ類土器としたものは、外面に二叉状工具で施文を行ない、貝殻条痕文が見られるものである。8の1点のみが該当する。

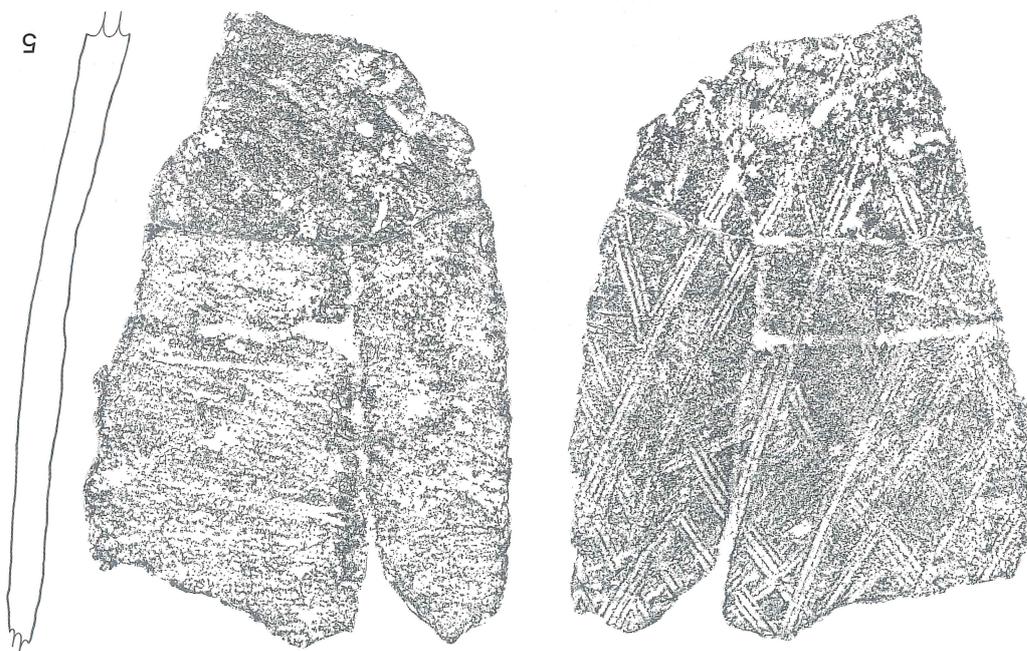
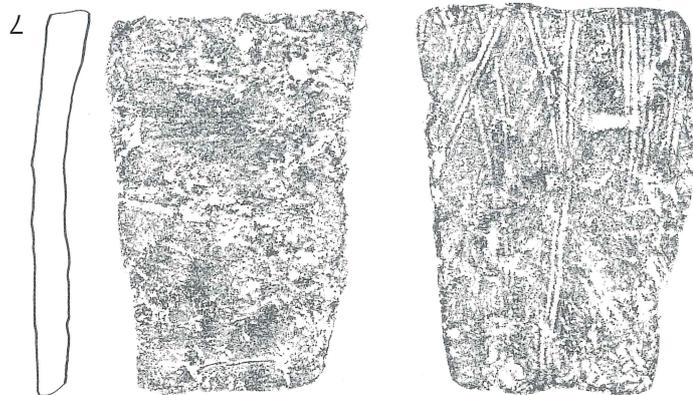
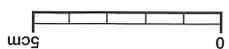
この土器片は、上位、下位に二叉状工具で小波状に横位に施文を行い、中央部には2本単位の貝殻条痕文が横位に施されている。この貝殻条痕文は上位にも施されいくらか曲線を描くように施文が行われている。器形は胴部が膨らみ、小型の鉢になると思われる。内面はナデ調整が行われている。極めて出土類例の少ない土器である。

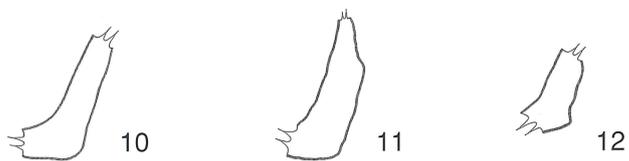
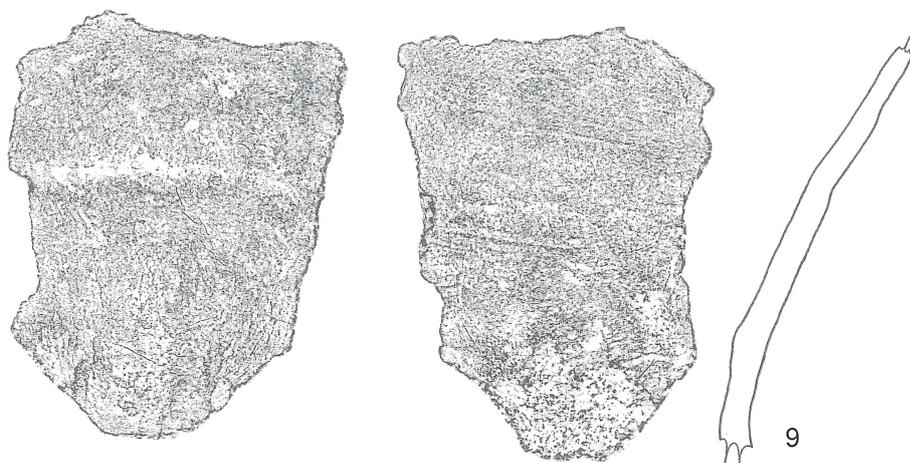
Ⅲ類土器（第11図9～12）

Ⅲ類土器としたものは、無文土器片及び底部片である。

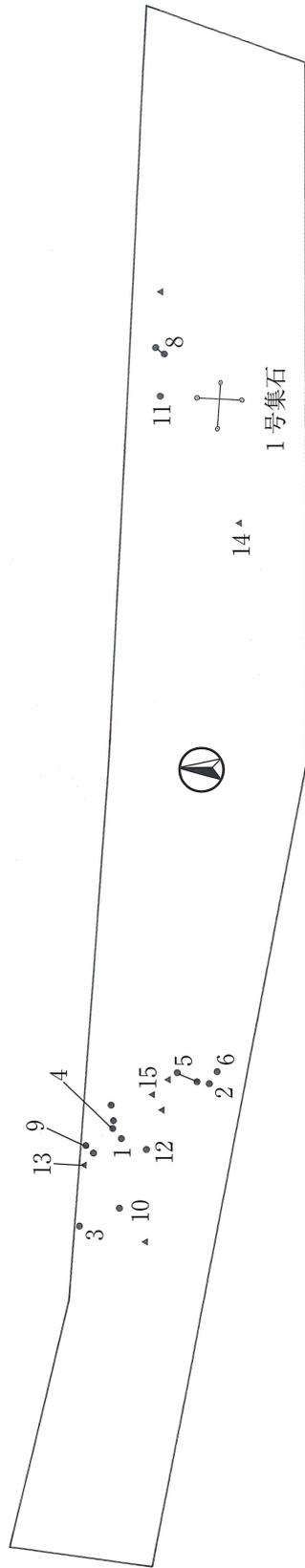
9は無文の土器片である。器形は胴部から口縁部に向かって大きく外反していくものと思われる。外面は丁寧なナデ調整が施されている。中央部付近には粘土の繋ぎ目が観察される。内面は貝殻条痕によるナデ調整が行われている。10から12は平底の底部である。いずれも文様は施されていない。10・12の内面は丁寧なナデ調整が、11は貝殻条痕によるナデ調整が施されている。12は小型土器の底部と思われる。

第10図 出土遺物(2)





第 11 图 出土遺物 (3)



●土器
▲石器・磔

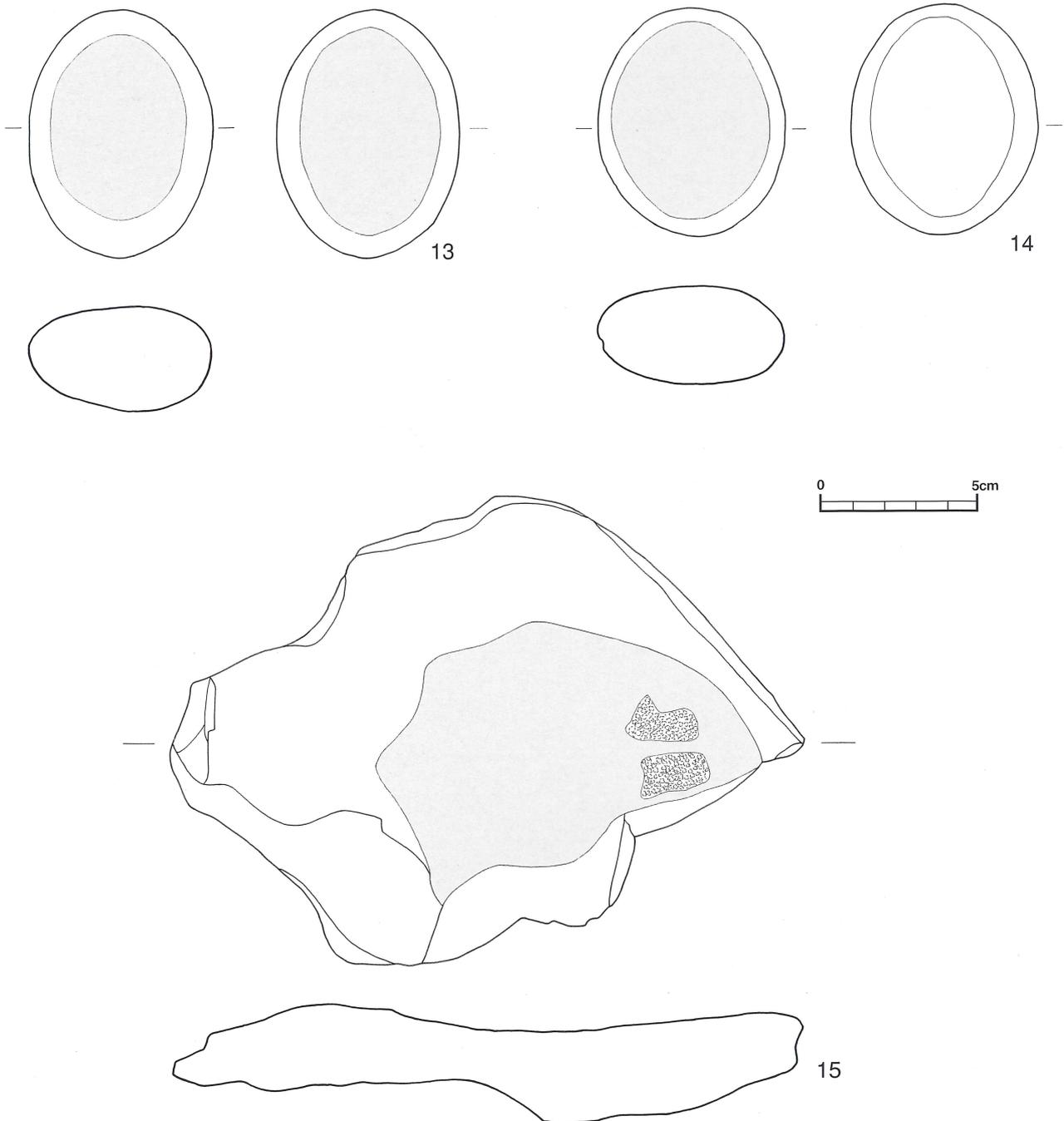


第12图 遺物出土状況

(2) 石 器 (第13図13～15)

石器の出土は少なく、磨石が2点と大型の石皿・台石類が1点出土したのみである。出土した層はⅢ層ベージュ色ローム土からの出土である。

13・14は磨石である。この2点の磨石は最大長が約7～8cm, 最大幅が約6cm, 最大厚が約3cmと非常に小型で、手のひらにすっぽりと隠れるくらいの大きさで、非常に小型のものである。石材はいずれも砂岩である。15は石皿・台石類としたもので、重量36kg, 最大長約66cm, 最大幅約44cm, 最大厚約10cmと非常に大型のものである。磨面、敲打痕が観察される。石材は砂岩である。



第13図 出土遺物(4)

第3表 土器観察表

挿図	番号	器種	部位	出土層	施文・調整		色 調		胎 土	焼成	取 上 番 号
					外 面	内 面	外 面	内 面			
9	1	深鉢	口縁部	Ⅲ	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・長石・ 砂粒・礫	良好	17
	2	深鉢	口縁部	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	7
	3	深鉢	胴部	Ⅲ	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	乳茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・ 砂粒	良好	21
	4	深鉢	胴部	Ⅲ	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・長石・ 砂粒・礫	良好	15
10	5	深鉢	胴部	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	灰黄黒茶褐色	灰黄黒茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	8・9
	6	深鉢	胴部	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	乳茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	6
	7	深鉢	胴部	確認調査 Iトレンチ	貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	灰黄黒茶褐色	石英・長石・ 砂粒	良好	52
11	8	浅鉢	胴部	Ⅲ	二又状工具 貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	黄黒茶褐色	石英・長石・ 砂粒	良好	2・3
	9	深鉢	胴部	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 ・礫・金雲母	良好	19
	10	深鉢	胴部	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	22
	11	深鉢	胴部	Ⅲ	ナデ	ナデ	乳茶褐色	黒褐色	石英・長石・砂粒	良好	4
	12	深鉢	底部	Ⅲ	ナデ	ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	16

第4表 石器観察表

挿図	番号	器 種	出土層	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	取 上 番 号	備 考
13	13	磨石・敲石	Ⅲ	砂岩	7.9	5.9	3.3	200	24	
	14	磨石・敲石	Ⅲ	砂岩	7.3	6	3.2	150	5	
	15	台石・石皿	Ⅲ	砂岩	66.3	44.2	9.7	36000	11	

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺構

遺構は集石が1基検出された。構成される礫は6点であり、大きさは全て拳大程である。検出した層は第Ⅲ層のベージュ色ローム層であり、礫が集中している範囲は約2m×2mである。礫は炎熱を受け、赤化し熱破碎が見られるものもあった。構成される礫は全て砂岩である。礫には敲打痕や擦痕、剥離などの調整痕などがみられるものは1点もなかった。検出状況から集石とみなし、1号集石としたものである。今回検出されたものは検出状況から集石が意図的かまたは自然であったのかは判断しづらいが、本来の集石が崩壊或いは廃棄され、構成されていた集石の下部のみが残ったものと思われる。集石の内部、周辺からは炭化物等は検出されなかった。また下位には掘り込みは確認されなかった。調査地全体を第Ⅲ層面及びⅣ層上位面で精査を行い、遺構の有無を調査したが集石以外の遺構は検出されなかった。調査範囲が狭小であったことも遺構が検出されなかった要因の一つであると思われる。周辺の出土遺物などや検出層から縄文時代早期後葉に使用された遺構であると思われる。

第2節 遺物

(1) 土器

出土した土器片は一括取上げ土器片を含め41点の出土であったが、小片や摩耗が激しいものが半数以上を占めた。

出土土器の主体をなすものは貝殻文系の土器である。1は口縁部で浅い1条の貝殻押引文を横位に施している。しかしながらこの押引きは施文途中で終わっている。また1条の貝殻条痕文が口縁上位から右斜め下がりには施されている。口唇は粗く仕上げしており、平坦ではない。2は浅い貝殻条痕文が斜方向に施され、口唇部外面側縁部に沿って浅い細かいキザミが横位に5箇所施されている。口唇部は1とは対照的に平坦に仕上げている。1・2は口縁部であるが、小片のため土器型式は不明であるが、出土層位、施文などから縄文時代早期後葉のものであると思われる。

5～7は数条の縦位の貝殻条痕文がX状を呈すように斜方向に交差させて施文が行われている、器壁の厚い土器である。既存の土器型式としては苦浜式土器に近いものと思われる。

8は二又状工具によって小波状に施文が施され、中央部には2本単位の貝殻条痕文を横位に施しており、この条痕文は一見沈線を意識しているように見えるほど、沈線に近いものである。上位にも、横位の2条の貝殻条痕文が施されているが、中央部のものと比べいくらか曲線を描いている。器形は胴部が膨らむ、浅いボール状で、小型鉢になると思われる。出土類例が少ない土器と思われるが、既存の土器型式に当てはめるとすれば、器形や貝殻条痕が沈線化している施文などから、平椀式土器が最も類似していると思われる。9は無文の土器である。胎土に多量の金雲母が混じっているのが特徴的である。10から12は底部片であるがいずれも小片であるため全容を推定することは困難であるが、いずれも小型の底部になると思われ、特に12は非常に小型の土器になると思われる。これらの土器は出土した層位及び土器の施文、器形などから縄文時代早期後葉のものに位置づけられると思われる。

(2) 石器

石器の出土は非常に少なく、僅か3点の出土である。調査面積が狭小であったことや、発掘調査が遺跡の主体部から外れた部分であったために、出土数が少なかったとも考えられる。

出土した石器は小型の磨石が2点、台石・石皿類が1点出土したのみである。石材はいずれも砂岩である。特に台石・石皿(15)は重量が36kgあり、非常に重く大型のものである。

第3節 総括

調査を行った柿之木遺跡は、遺物の出土量は土器が41点、石器が3点の出土であった。遺構は集石が1基検出されている。時期区分としては縄文時代早期後葉の遺跡である。

調査地は簡易のコンクリート道路や畑地であり、過去にこの道路工事や水道管工事のため数回にわたって掘削が行われていた地でもあった。確認調査により一部アカホヤ火山灰層は削平を受けている箇所もあるが、その下位の遺物包含層であるベージュ色ローム層の堆積は確認することができたため、調査を行ったが、遺物はアカホヤ火山灰直下のベージュ色ローム層から出土し、遺構も同じくベージュ色ローム層からの検出であった。

出土遺物では苦浜式系(I類土器 5~7)と思われる土器が出土していることが注目される。苦浜式土器は苦浜貝塚(種子島 中種子町)を標識遺跡とするものである。

「土器は胎土極めて粗く混砂量多く、色調は赤褐色乃至灰色黒色、焼成は脆弱で下腹部は特に粗である。全般的に厚手の土器で、一見轟式に似た凸帯文が口頸部にあつて、この凸帯の上に刻みがある。この凸帯を中心にして底部に至るまでサルボウの貝殻唇縁による貝殻条痕文や圧痕がある。また、篋書の手法もある。内面は無文であるが、植物質のものによる擦痕の認められるものがある。器形は頸部にゆるいくびれのある鉢形平底、またはくびれない無文の深鉢型土器、大形の土器には口縁部に刻みのあるもの、山形隆起をなすものがある。」

(中種子町郷土誌 中種子町郷土誌編集委員会 1971年より)

「多量の貝類、獣骨、魚骨に混って、器面に貝殻条痕文を施した深鉢形土器が出土している。口縁部・頸部に刻み目のある隆帯・凸帯のつくもの、口縁に山形隆起のあるもの、器面にサルボウの貝殻腹縁による圧痕文・刺突文のあるものなどがあり、轟式土器が南下して地域化したものと考えられ苦浜式と名づけられた。この苦浜式土器は、苦浜貝塚の他に中種子町女州・高峯、西之表市安納大平などでも出土している。」

(南種子町郷土誌 南種子町郷土誌編纂委員会 1987年より)

上記のように定義された苦浜式土器は、轟式土器が南下して地域化したものと捉えられていたが、横峯遺跡(南種子町)の調査によって、アカホヤ火山灰層の直下から出土することが確認され、縄文時代早期終末期の土器として位置づけられるようになり、その後の資料の増加、再検討が行われ、南九州の縄文時代早期後葉のひとつの土器型式として編年に組み込まれていくものとなってきている。本遺跡から出土したこれに類似する土器片(5~7)は、貝殻条痕の地文調整が施されていないのが大きな特徴である。そのため苦浜式系か苦浜式に近い土器と思われ、その後の轟式土器につながる資料であると考えられる。

調査面積が狭小であったため、遺跡の全体像や生活していた時間などを把握することは今回の調査ではできなかったものの、種子島・南九州の縄文時代早期後葉の土器文化を探るうえで貴重な資料が出土したことは特筆される。今後、類似資料が増加することによって、縄文時代早期後葉の塞ノ神式土器・苦浜式土器、縄文時代前期の轟式土器との関連性について整理、検討がなされ南九州の土器編年がより具体的になっていくことであろう。

遺跡の主体部は調査区外に残存している事が考えられ遺跡の立地や周辺環境など今後再検討し、種子島の縄文文化の様相を探っていく必要がある。

出土遺物は少なかったが、種子島の縄文時代早期後葉を探るうえで貴重な資料を提示してくれた遺跡であった。

参考文献

「先史古代の鹿児島 資料編」鹿児島県教育委員会 2005年

「中種子町郷土誌」中種子町郷土誌編集委員会 1971年

「南種子町郷土誌」南種子町郷土誌編纂委員会 1987年

「横峯遺跡」南種子町教育委員会 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1993年

「横峯C遺跡」南種子町教育委員会 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 2000年

「三角山遺跡群(3)三角山I遺跡 第2分冊」鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96) 2006年

写真図版



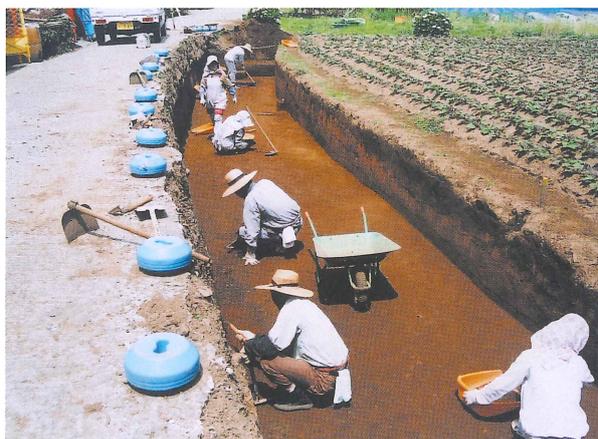
発掘調査前



発掘調査状況



発掘調査状況



発掘調査状況



発掘調査状況

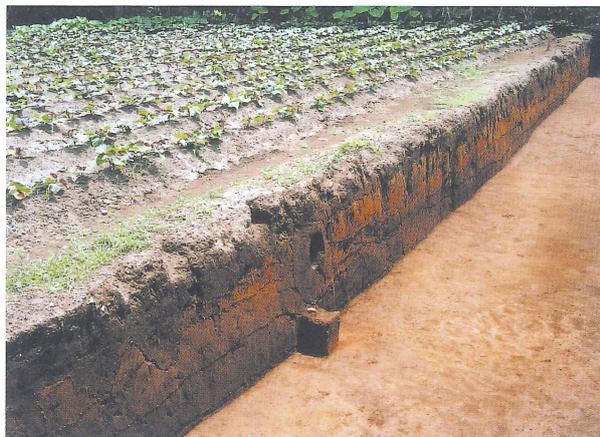


発掘調査状況

調査状況 (1)



北側土層断面



北側土層断面



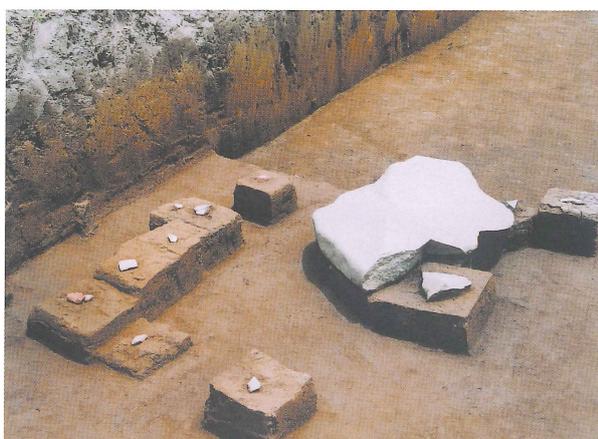
南側土層断面



南側土層断面

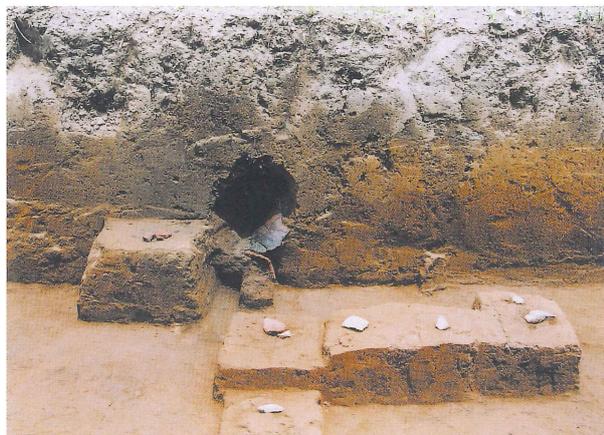


1号集石



遺物出土状況

調査状況 (2)



土器出土状况



土器出土状况



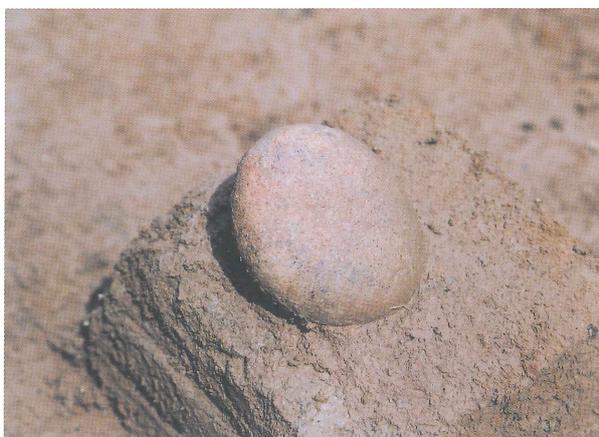
土器出土状况



土器出土状况

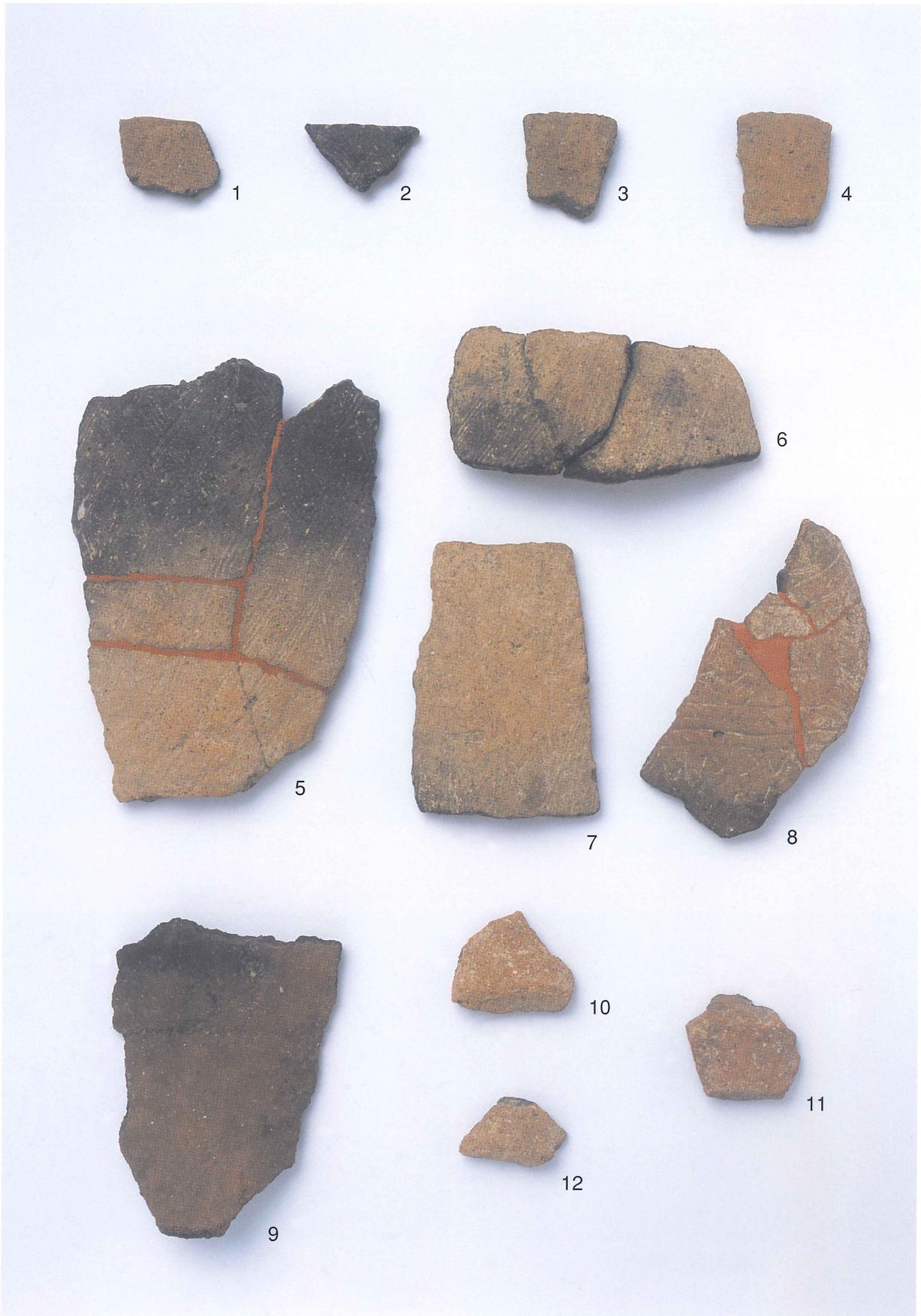


土器出土状况



磨石出土状况

調査状况 (3)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 (19)

柿之木遺跡

発行日 平成 19 年 3 月
発 行 鹿児島県西之表市教育委員会
〒 891 - 3193 西之表市西之表 7612 番地
TEL 0997 - 22 - 1111
印 刷 (有)種子島新生社印刷
〒 891 - 3101 西之表市西之表 16736-1
TEL 0997 - 22 - 0476